文学の杜 仙台文学館友の会会報

第75号
令和6年7月20日発行

仙台文学館友の会（仙台文学館内）
〒981-0902
仙台市青葉区北根2丁目7の1
電話　022(271)3020
仙台文学館のホームページ
https://www.sendai-lit.jp/

2024年度スタート

新型コロナ禍後は文学の力を

仙台文学館友の会の2024年度総会はゴールデンウィーク中の5月3日に文学館講習室で開かれた。始めに会長の渡辺祥子さんから「新型コロナ禍をほぼぬけて今後は文学の力が大切にされていくのでは」と挨拶があった。その後事務局の伊藤美菜子さんが司会、渡辺会長が議長に就いて議事が始まった。

議案の討議では2023年度の事業報告と収支決算、監査報告を承認、会員証の印刷費等諸経費の節約対策について補足説明があった。2024年度事業予定案、予算案についても、原案通り出席者全員の拍手で可決され、役員とサポーターが紹介された。その他では、出席者から「歴代会員証を保管している、毎年新調は負担が大きいのではと感じていた」の発言があった。参加者は13名だった。

▽会長　渡辺祥子　▽副会長　寺嶋信　▽幹事　一文字ひろみ　▽監事　近田裕子、長沼和子　▽サポーター　池田ミチ、尾形光子、加藤裕子、佐藤満子、佐野のぶ　▽事務局　伊藤美菜子

総会終了後、25周年記念特別展「詩人・石川善助をたずねて～北方への道のり」について副館長の赤間さんによる解説講座があった。仙台出身の詩人の悲喜こもごもの足跡、地元ならではの興味深いエピソードも交えた講座のあとは、ゆかりの場所が近くにもあることが分かって、訪ねてみたい心境になった。

自由の翼とともに

会長　渡辺　祥子

先が見えなかったコロナ禍が一応の収束を見せた今、改めて振り返る必要があると、ここ数年の挨拶文を自分で読み返してみました。そこには、「文学には、心に〝私〟という空間を取り戻す力がある」とか、（文学というもう一つの世界に触れることで）「私たちは息苦しい現実だけにとわれず、そこから少し距離を取り、本当の意味での自分を生きられると思う」など、文学の魅力を取り上げ直して評価する言葉がありました。

本当にこれが実感だったなぁと、皆さまから投稿いただいた言葉などもしみじみと思い出しました。二度と起こってほしくない大変な数年間ではありましたが、全ての自由が制限されたように見える社会の中でも、私たちの傍らにはちゃんと自由の翼が用意されているのだと気づかされた貴重な時間だったようにも思います。

新年度も会報誌や友の会イベントなどを通して、心に潤いが保たれるような交流が出来れば幸いです。引き続きのご支援、どうぞ宜しくお願い致します。

文友一滴

「真理がわれらを自由にする」

中島京子著『夢見る帝国図書館』を読んだ。気になったのが国立国会図書館のホールにあるこの銘板のことだった。本好きな初老の喜和子さんと私（語り手）が、上野の森の帝国図書館の変遷、戦争による本の疎開や本の略奪などの物語を進めていく。著名な作家たちが図書館を利用していただろうことや、子ども図書館に潜った喜和子さんの話など面白いことが満載であった。

戦後しばらくして国会議事堂近くに国立国会図書館が建てられた。そのホールに文頭の文字が刻まれているというのだ。なぜに聖書の言葉とおぼしきものが銘板に？　気になってしかたがなかったので行って確かめることにした。銘板を見るだけの不純な動機である。

新館に入り登録利用者カードを作った。広い閲覧室、天井の高さ、壁面の大きさはいずれも半端ではない。壁に掲げてあるタペストリーに圧倒された。閲覧室では、みんな黙々と机に向かっていた。許される範囲でいろいろなところを巡ってみた。肝心のホールの銘板はあまり目立たず横書きに刻まれていた。職員の方からさらりと説明をしても多くの本を読み知識を得て真理を追究しよう。国の民主化と世界の平和の祈りを込めてというふうに、私なりに解釈した。その横にはギリシャ語で聖書の言葉「真理はあなた方を自由にする」が刻まれてあった。満足して館を後にした。地上4階地下8階の建物を振り返り、以後使わないであろうカードをしまい込んだ。

研究者でも何でもない私は近くの図書館で十分。文学館の展示を見てそれにかかわる本を探しに図書館へ行く回数は増えた。以前は、本は買って読むもの、そばに置いておくものだった。最近は、図書館を利用することが多くなりつつある。（一）

私と文学・08

読みなおす

折に触れ読みなおす本がある。宮本輝著『泥の河』だ。

昭和31年の大阪。濁った川のほとりに在る場末のうどん屋。そこの少年と、粗末な廓舟で母親と暮らす姉弟とが出逢い友情を育む。ある日、姉弟を乗せた舟が岸を離れようとしていた。事情が分からないまま、うどん屋の少年は半泣きで舟のあとを追いかけ、姉弟の名前を繰り返し呼ぶ。が、反応はない。水面に眼をやると、舟のあとを「お化け鯉」が追いかけている。「お化けや。ほんまにお化けがうしろにいているんやでェ」と、少年は最後の大声をしぼり叫ぶが、舟は川上へ消えてゆく……。

お化け鯉が惜別の情を駆り立て、しみじみとした余韻が残る。電話が普及していなかった時代、別離は〝今生の別れ〟のようだ。60年余続いた昭和を一括りにし語ることはできないが、作者は私と同じ団塊世代。育った環境の違いこそあれ、あのころの少年たちの姿が情感深く描かれており、読むたびに、かすむ少年時代の記憶がよみがえってくる。

9歳の少女が母親に昭和という時代について、色々訊いている。昭和は携帯電話やインターネットがなかったという母親。しかし、少女は携帯電話とインターネットがない時代をまるで想像できない。新聞に載った最近の記事だが、無理もないと思いつつ遠のく昭和をつくづく感じずにはいられない。老婆心ながらこんな想いが頭をかすめた。いつの日か、この少女が『泥の河』を手に取り読んだら何を感じるのだろう……。

時代・世代の変化がめまぐるしい。つぎ、『泥の河』を読みなおすときは、どんな世の中になっているのか、期待とも不安ともつかない感情がこみ上げてくる。（其田敏美）

文友の部屋

✻新聞に週の売れ筋本が載る。この頃宮島美奈著『成瀬は信じた道をいく』　これが気になっていた。店先でペラペラめくってみた。成瀬あかりの特徴的なしゃべくりが元気そうな会話で綴られている。帯にはその前途、誰にも予測不能！と。即お持ち帰り。「成瀬慶彦の憂鬱」と「探さないでください」はあり得ないと思いながらも面白く読んだ。（ふみひろ）

✻映画はずっと洋画派だったが、「せんだい映画村」で解説やゲストの講演を聞き、日本映画の奥深さと面白さを知った。昨年夏に亡くなった代表者の住まいが、今「映画資料室」となっている。友人と訪ねると、少人数の上映会もする部屋の本棚には映画に関する書籍がぎっしり。改めてその映画愛に感嘆して帰ってきた。（H・M）

✻谷崎潤一郎の「細雪」には後日談があるのを最近知った。終わり方が中途半端で、この先どうなるんだろう、と検索してみたら「三つの場合～明さんの場合（細雪後日談）」を見つけたのだ。私が読んだのは谷崎潤一郎全集第23巻。戦時でもあり、随筆なので小説とはだいぶ趣きが違うが、その後もわかり興味深く読めた。（i）

風と歩こう 24

Photo by Ryuji Sasaki

雨の日の文学館が好きだ。特に梅雨時は、蒸し暑くても湿気寒くても館内は快適だ。交流コーナーのカウンターに座って外を見ると、薄い雨の膜が張った石舞台、土は黒く湿り木々の葉に水滴が光っている。音の全てを北根の杜が吸い取っているようだ。外を眺める時間と本を読む時間、どちらが長くても満ち足りた時が過ぎていく。

梅雨の晴れ間には子供の声が聞こえる。保育園の散歩だろうか。夏休みが始まると、小学生の声も聞こえてくる。子供の元気な声は心地よく、読書を妨げるほどではない。猛暑が続く最近の夏、快適な文学館で過ごしましょうと誘いたくなる。読書に飽きたら、少しくらいならエントランスロビーを走り回ってもいいと思う。石舞台ではしゃいでもかまわない。読書、そして文学館は楽しいところという体験をしてほしいと思う。

北根の杜の蘖（ひこばえ）が若木になるころ、成長した彼らの記憶の底から「文学館」という存在が浮かび上がってきてくれることを願っている。（和）

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第75号をお届けします。

▽随分久しぶりに定義山西方寺をお参りした。境内をゆっくり散策し、御祈祷に参加する。茶室でお抹茶もいただいた。並んで三角油揚げを買い、そこで揚げたてを食べるのははずせない。緑がいっぱいの中、美味しい空気を吸い込んでいい一日を過ごした。ご利益があるといいな～（一）

▽街から本屋が消えているということはわかっていたのに、一番町の金港堂本店の閉店はショックだった。あの店は大学にも近いし大丈夫と思い込んでいた。4月下旬に寄ると、客が数人名残惜しそうに本棚の間に佇んでいた。私もそうしてから、残り少ない本棚の文庫本を2冊買って出た。（近）

▽孟宗汁と朝堀の筍を求めて鶴岡に向かった。その思いは叶わなかったが、致道博物館で興味深い体験をした。若い女性が何組か、刀剣の展示に見入り、話し込んでいる。刀剣女子たちにつられて覗き込んだ。刀剣を熟視したのは初めてだ。それらは、美しいけれど別の世界の生き物、そんな気配を漂わせていた。（和）

▽福島第一原発の廃炉作業現場を見学した。4基の原子炉建屋が爆発のすさまじさを残して目の前にあり、巨大な処理水タンクに圧倒される。今、毎日500人が仕事をしているというから驚く。

廃炉は遠く先である。ここから始まった福島の苦しみと悲しみを忘れてはならないと改めて胸に刻む。（佐）

この印刷物は再生紙を使用しています

編集担当よもやま話

仙台文学館は今年開館25周年を迎えました。「友の会」は同じ年の秋に発足し、翌年一月に会報第1号が発行されました。つまり、友の会も25周年、この機会に「編集担当の茶話会をしましょう」ということになりました。定例の編集会議は時間や話題に制約があります。そこで、「ひざしの杜」でお茶を片手に、日ごろの思いを話し合ってみました。

（編集担当・一文字、近田、佐野、長沼、事務局伊藤）

会報「文学の杜」の特徴

ほとんどの記事を会員が書き、それを年3回発行していることです。全国の文学館の中でもまれだと聞いています。会員の皆さまのご協力がなければできないことです。

募集原稿と依頼原稿の話

64号から始まったテーマを決めての原稿募集は、コロナ禍に触発されて生まれた企画です。編集会議でテーマを決めるのは楽しい時間です。何より会員の2割近くの方からの投稿があり、担当を鼓舞してくれます。一方「文友の部屋」への投稿は少なく「何かいい方法はないかしら」と思いあぐねているところです。「私と文学」は「私と郷土と文学」を引き継いだ企画です。タイトルの変更は「縛りを少なくし、間口を広げよう」という思いからでした。好きな本、映画の感想、旅と本など、皆様の投稿をお待ちしています。

毎号掲載していた「友の会随想」は、年に一度になりました。「随想」は「書いていただけませんか」とお願いするところから始まります。それが最近とても難しくなってきています。なぜでしょう。それは「会員数が減ったからだよね」という話になりました。

誌面に隠れた時代の流れ

会員数が300人を超えたころもありました。それが現在は100人と少しです。会報に会員名簿を載せていた時期があったなんて、今では考えられないことです。人気があったバスで行く「見学会」は現在休止状態です。会員数の減少の他に、会員の高齢化も原因のひとつです。それに団体行動から個人行動への、世の中の気風の変化もあります。「見学会」休止で、会員同士が知り合う機会を一つ失いました。「25年の歴史の中で会報の役割が変わってきた」と、話をしていて気付きました。

文友一滴と風と歩こうの話

会報1ページの下段は、「北根二丁目」「松風蘿月」「文友一滴」とタイトルを変えながら、会報担当者が書き続けてきたコーナーです。タイトルと同じように内容も変化しています。4ページの「風と歩こう」は、自然に囲まれた文学館の四季を反映させて、文学館と友の会を身近に感じていただければという企画です。

これからも一歩ずつ進もう

会員減少や高齢化は難敵です。でも、文学館や友の会の存在は確かなものです。これからに繋ぐためにも、少しでも会員の顔が見える誌面を作っていこうと、編集担当たちに意欲が湧いてきました。これからの一歩を踏み出すために、皆様のご投稿をお待ちしています。（和）

第62回読書会

優雅なひとときをあなたと

O・ヘンリ「桃源境の短期滞在客」

ブロードウェイに隠れ家のようにたたずむ優雅な「ホテル・ロータス」。爽やかな涼しさと静かさ、どんな要求でも満たしてくれる大勢の給仕たち。

7月のある日、ひとりの若い女性がやって来た。気品にあふれた物腰、しとやかさと美しさを備えたマダム・ボーモン。3日後、端正な面立ちの青年ハロルド・ファーリントンがロータスの静かな流れの中に音もなくすべり込んできた。

やがて滞在を終えようとするふたりは、その朝どんな約束をすることになるのか…。

＊外国文学は描写が広々と感じられる。

＊こんな贅沢な体験をしてみたい。

＊アメリカの空気を感じた。

＊最後の場面でほっとさせられた。

＊空気感や場の雰囲気など、訳者の力量を感じた。

＊自分へのご褒美としての行動が素晴らしい。

＊物語の面白さが、書き出しで分かった。

＊最後の展開が良い、温かな物語だ。

4月10日　新会員を迎えて8名出席。（佐）

第63回読書会

ごめんなさいが言えますか

重松　清「カレーライス」

この作品は小学校高学年の教科書に採用されたもので、主人公は同年齢の男の子。父親に対するささやかな反抗心を抑え切れない自分と、その自分の心を見つめている様子が、温かな家庭の日常の描写の中に描かれている。

＊子どもの成長を、身長や運動能力などでなく味覚で感じたところが珍しい。

＊子ども目線で描かれているのに、作品の裏側から社会の流れが見えてくる。

＊主人公が心を痛めている場面が、胸に沁みる。

＊子どもが主人公の作品を初めて読んだが、とても良かった。

＊この作品を授業で読み、子どもたちはどんな感想を持つのだろうと思った。

＊内容は単純なのだが心に残る。

我家のカレー事情や子育ての話題も。

6月12日　5名出席（佐）

次回読書会は10月9日(水)　14時

マンスフィールド「湾の一日」（新潮文庫『マンスフィールド短編集』所収）

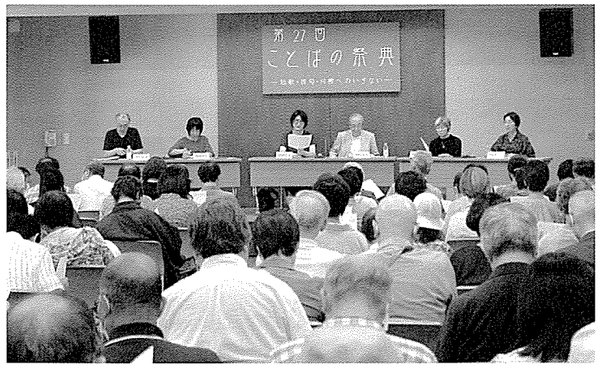
※友の会会員は自由に参加できます。

申込みは友の会事務局まで。

初夏の文学館に心を詠む

第27回ことばの祭典

短歌・俳句・川柳へのいざない



6月22日土曜日、万緑に包まれた仙台文学館で、今年もことばの深さを堪能する恒例のイベントが行われました。お天気に恵まれたこの日、参加者が続々と来館し、受付開始の午前10時には、2階フロアが大勢の参加者で埋まりました。

ひとりで短歌・俳句・川柳の3部門すべてに応募することもできるので、楽しみが膨らみます。受付と同時に発表されたお題は「鼻」と「拾う」のふたつ。さて、どのような作品が出来上がるのでしょうか。

締め切り時間までの1時間半は、三々五々好きな場所で吟行に集中する人々の姿が有り、全館が文学館らしい雰囲気に満ちていました。午後の作品講評や入賞作品の発表を待つまでの昼食時間には、レストラン「ひざしの杜」の特製弁当も人気のようでした。

友の会では、今年も応募用紙の配布と作品受付のお手伝いをしました。県内外からの参加者が有り、就学前と思われる姉妹がお母さんと一緒に俳句部門に応募するなど、幅のある行事になっているのは嬉しいことでした。参加者に若い人が多く見受けられたことも、文学館に明るい未来を見る思いがして心が弾みました。参加者は135人でした。

選者は短歌部門が、本田一弘氏と梶原さい子氏。俳句部門が、堀田季何氏と高野ムツオ氏。川柳部門が、斎藤泰子氏と雫石隆子氏の6名。（佐）

《ことばの祭典賞受賞作品》

◇短歌部門

その鼻もまた濡れてゆくたたかいの止んだ世界の荒野のおおかみ　髙橋小径

◇俳句部門

夜濯の母の鼻唄とめどなし　小林宏基

◇川柳部門

脱け殻を拾ってたまに着てみたり　佐渡真紀子